

学位論文要約

学童期の話し合いにおける相互作用と
意味の生成に関する研究

— 《共創的共有項》の形成過程を中心に —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教科教育学分野
国語文化教育学領域

D180398 明尾 香澄

1. 論文の構成

序章 研究の目的と方法	1
第1節 研究の目的	2
第2節 研究の方法	4
第1章 国語科話し合い学習者研究の成果と課題	5
第1節 国語科話し合い学習指導研究の概観	6
第1項 話し合い学習指導研究における「思考生成」過程への着目	6
第2項 話し合い学習指導研究におけるメタ認知への着目	7
第2節 国語科話し合い学習者研究の成果と課題	8
第1項 国語科におけるコミュニケーション観	8
第2項 国語科の話し合い授業・学習者研究	10
第3項 相互作用の解釈過程に着目した「読むこと」の話し合い授業学習者研究	12
第2章 話し合いにおける《共創的共有項》形成モデルの提案	15
第1節 シンボリック相互作用論と意味づけ論の検討	16
第1項 シンボリック相互作用論について	16
第2項 シンボリック相互作用論と意味づけ論との接合	19
第3項 《共創的共有項》の定義	20
第2節 音声言語活動研究におけるモデルの整理	21
第1項 認知心理学の知見に基づいた個体内モデル	21
第2項 意味の生成に着目した相互作用モデル	23
第3項 相互作用をふまえた個体内変化モデル	24
第3節 《共創的共有項》形成モデルの提案	25
第1項 現実題材と虚構題材	25
第2項 現実題材における《共創的共有項》形成モデル	26
第3項 虚構題材における《共創的共有項》形成モデル	28
第3章 《共創的共有項》に着目した話し合いプレ実践の検討	31
第1節 小学校2年生の実践 i —— 《共創的共有項》の具体	32
第1項 実践概要	32
第2項 分析対象について	34
第3項 対象実践の分析	36
第4項 考察	47
第2節 小学校2年生の実践 ii —— 新たな意味づけと《共創的共有項》	48
第1項 実践概要	48
第2項 分析対象について	50
第3項 対象実践の分析	52
第4項 考察	61
第3節 話し合いにおける《共創的共有項》形成	61

第4章 話し合いにおける《共創的共有項》形成の実証的検討	63
第1節 調査の概要.....	64
第1項 調査概要.....	64
第2項 分析対象.....	67
第3項 倫理的配慮.....	68
第2節 各班の話し合いの概要.....	68
第1項 3年生現実題材における各班の進行.....	68
第2項 3年生虚構題材における各班の進行.....	69
第3項 5年生現実題材における各班の進行.....	70
第4項 5年生虚構題材における各班の進行.....	71
第3節 調査結果の数的概括.....	72
第1項 話し合い後の振り返りシート.....	73
第2項 発話数と新たな意味づけ数.....	75
第3項 意味づけ率と自己評価の相関.....	76
第4節 《共創的共有項》形成の実際 i —現実題材—.....	87
第1項 3年生現実題材.....	87
第2項 5年生現実題材.....	94
第3項 現実題材における《共創的共有項》形成.....	104
第5節 《共創的共有項》形成の実際 ii —虚構題材—.....	106
第1項 3年生虚構題材.....	106
第2項 5年生虚構題材.....	114
第3項 虚構題材における《共創的共有項》形成.....	121
第6節 《共創的共有項》形成過程分析のまとめ.....	122
第1項 仮説① 《共創的共有項》形成と新たな意味づけ.....	123
第2項 仮説② 《共創的共有項》形成の学齡的差異.....	123
第3項 仮説③ 《共創的共有項》形成の題材による差異.....	125
第5章 国語科における《共創的共有項》形成をふまえた話し合い支援への提言	126
第1節 能力観の転換とそれに関わる評価への示唆.....	127
第1項 状況依存的な能力観.....	127
第2項 《共創的共有項》形成に着目した話し合いの評価.....	128
第2節 話し合い指導支援への試案.....	129
第1項 《共創的共有項》をふまえた取り立て指導の検討.....	129
第2項 《共創的共有項》をふまえた「状況」への支援の検討.....	135
終章 研究の成果と課題	139
主要引用参考文献	143
資料編	153

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

増田信一（1994）が指摘するように、音声言語活動はその時代の教育の方向性、主に学習指導要領の変遷とともに隆起と衰退を繰り返してきた。しかし近年、多様性が謳われる社会の中で、対話概念¹の広がりとともに、話し合い²の重要性は盤石なものとなってきているといえよう。そのことに国語科教育の「話すこと・聞くこと」の領域が重要な役割を果たすことは言を俟たない。

国語科教育において、早くから対話概念とその指導を示したのものとして、倉沢栄吉・青年国語研究会（1970）が挙げられる。倉沢（1970）は、「人間関係を非常にだじにする考え方から対話の重要性が認識されてきたのだろう」（p.40）とし、対話が人間関係と結びつくことを指摘する。しかし、それは次のような矛盾を抱えていると述べられる。

内部指向的に事物認識、理性的な認識能力を高めるといふことと、ことばの持っているひとつの倫理性というものをだじにして、相手を相手として尊重していく。そうしながら相手というものと、いつもいっしょになって、社会をよりよくしていこうという、ことばの持つ倫理性と論理性というものの実は両立しなければならない矛盾する面の問題について、教育をするというのが、国語科から追及する話しことばの研究ではなかろうか。（p.69）

関係性を重視する「倫理性」と理性的な認識能力である「論理性」が、「矛盾する面の問題」であると指摘される³。森美智代（2011a）は「話すこと・聞くこと」教育の理論的研究を「個人の内的活動」と「関係性」で整理しながら、その二項対立を打開するために、倉沢（1970）が参照したマルティン・ブーバー（1923）の再検討、またその限界を示すエマニュエル・レヴィナスの検討を行い、「話すこと・聞くこと」の教育思想の構築を行っている。

本研究では、コミュニケーションを捉える視点からその矛盾点を照射する。倉沢（1970）では、コミュニケーションのモデルとして、送り手・記号・受け手からなるモデルが示される（p.136）。これは、シャノン・ウィーバーのモデルに代表されるような機械論的モデル（末田・福田,2003, p.38）と類を同じくする伝達モデルである。伝達モデルにおいては、その授受を行う個人の認知能力がより重要となる。そのため、個人と関係性が「矛盾する面」として捉えられるのである⁴。しかし、コミュニケーションを「シンボルを創造し、そのシンボルを介して意味を共有するプロセス」（末田・福田,2003, p.16）として捉えると、個人と関係性は矛盾するものではなくなる。山元悦子（2006）は、国語科のコミュニケーション教育の方向として、論理的表現力の育成を目指したスキルなどの指導ではなく、学級という社会的共同体のなかで、他者との相互作用を通して、「社会を共同で構築する能力の育成」を念頭に置くべきである

¹ 多田孝志（2016）は国語科における「対話」について整理した上で、その捉え方が広がってきていること、一方でグローバル時代の人間形成に対応した対話型授業の具体的な実践研究はほとんどないことを指摘している。

² 本研究においては西尾実の形態論に依って、話し手と聞き手が「一対多」であり、その役割が交代する「会話」の形態を話し合いとする。

³ 長田友紀（2011）は、Bales（1950）を参照しながら「課題領域」と「社会的情緒領域」という二つの極で国語科の話し言葉の目標論を整理している。また、長田（2013）においては、倉沢の述べる論理と対人関係の矛盾について、「その矛盾は「他者」という概念から止揚できる可能性が生まれつつある」（p.71）と述べられる。

⁴ 倉沢（1970）では、「対話というものを、単なる伝達としないで、実は伝達の裏に必ず表現者の主体というものがある」（p.70）と、単なる伝達ではないことが指摘されるが、モデルとの齟齬が起きているのである。

ことを述べる。国語科の話し言葉の目標論において、相互作用を通じた共同性について言及がなされているといえよう。一方で、「社会を共同で構築する能力」とは、話し合いの中でどのように現出するのだろうか。本研究では、末田・福田（2003）の述べる「意味を共有するプロセス」が重要であると考えられる。しかし、児童の実際の話し合いにおいて、「意味を共有するプロセス」が具体的にどのようなものであるのかは明らかにされていない。それは、シンボリック相互作用論を実証的な話し合い研究に援用することの困難さにも起因する。

そこで本研究では、国語科教育話し合い学習指導研究の課題を、「意味を共有するプロセス」を重視するシンボリック相互作用論やそれに関わる意味づけ論などをふまえて検討し、実際の児童の話し合いをもとに、「意味を共有するプロセス」について考察する。その際には、学童期の児童における少人数の自律的な話し合いを分析対象として考察を行う。これは、教師が介入しない状況における児童同士の話し合いの相互作用の実態を見取るためである。

以上をふまえ、本研究では次のような研究目的を設定した。

- ①国語科における話し合い学習指導研究の成果と課題を整理する。（第1章）
- ②シンボリック相互作用論を実証的な話し合い研究に援用する際の課題を意味づけ論をもとに整理し、課題を乗り越える概念としての《共創的共有項》の定義とモデル化を行う。（第2章）
- ③《共創的共有項》の形成を実践的・実証的に検討する。（第3・4章）
- ④以上の検討から得られた知見をもとに、話し合い学習支援への可能性を提示する。（第5章）

(2) 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の二つの方法で研究を行う。

一つ目は、先行研究の検討である。まず国語科教育の話し合い先行研究を整理し、その成果と課題を整理する（第1章）。その上で、シンボリック相互作用論や意味づけ論を援用しながら考察を行い、《共創的共有項》概念の定義とモデル化を行う（第2章）。

二つ目は、児童の話し合いの実証的な検討である。まず、小学校2年生での実践的な話し合い活動の分析から《共創的共有項》形成の具体を提示する（第3章）。その上で、小学校3年生と5年生で行った調査をもとに、《共創的共有項》形成の学齡的差異や題材による差異を検討する（第4章）。またその調査結果をもとに、話し合い学習指導支援への提言を行う（第5章）。

3. 各章の概要

第1章 国語科話し合い学習者研究の成果と課題

第1章では、国語科話し合い学習指導研究を整理し、その課題を示した。

音声言語教育を通時的に整理した増田信一（1994）は、その中で戦後の音声言語教育実践史が学習指導要領の影響を受けながら「隆起」「衰退」していることを指摘し、「音声言語教育を盛んにするためには理論面を確立していかななくてはならない」（p.209）という問題意識のもとで、音声言語生成過程を整理し、特に「思考生成」の過程を重視した（pp.209-211）。そのような中であって、平成元年版学習指導要領の影響、また「思考生成」過程への着目によって、音声言語教育研究は、理論面で発展していく。その一つの成果として中村敦雄（1999）では、群読・音読・話すこと・聞くこと・話し合いについて詳細な能

力表の作成が行われている。しかし、そのような能力表の作成は、話し合いの理論面を整備する一方で、話し合いを画一化してしまう側面をもつ。一般化が困難な話し合い学習指導において、2000年代に入ると、メタ認知への着目がなされるようになったといえる。

同時期、国語科教育の話し合い研究においては、「相互作用論的視点」にあたるコミュニケーション観への明確な言及が見られるようになる。吉田裕久(2002)によって「開発的な書物」(p.84)として掲げられる村松賢一(1998)／(2001)を比較すると、「機械論的視点」から「相互作用論的視点」への転換を見て取ることができる。森美智代(2011b)では村松(2001)について、「心理学の変遷に影響を受けた学習者観の転換について大きく取り上げられ、状況主義的学力観(社会構成主義あるいは社会・文化的アプローチによる学力観)の新しさと重要性が指摘されている」(p.392)とまとめられている。状況主義的学力観の台頭とともに、国語科話し合い授業・学習者研究においても質的な学習者研究が行われるようになり、相互作用をふまえた学習者の話し合いの実態が考察されるようになる。その中で、話し合い全体の学齡的発達や局所的な場面に着目した参加者の役割の検討、発話機能からみる話し合い全体の特徴が明らかにされてきた。しかしそのような国語科教育の話し合い学習者研究においては、相互作用において「参加者が共同で意味を作り出す過程」(村松,2001,p.36)は十分に考察されておらず、「読むこと」における文学的テキストの話し合い研究において相互作用をふまえた解釈過程への言及がみられるものの、それらは個人の解釈の変容に主眼が置かれているといえる。ここから、話し合いという相互作用において「参加者が共同で意味を作り出す過程」に着目する必要があることを提示した。

第2章 話し合いにおける《共創的共有項》形成モデルの提案

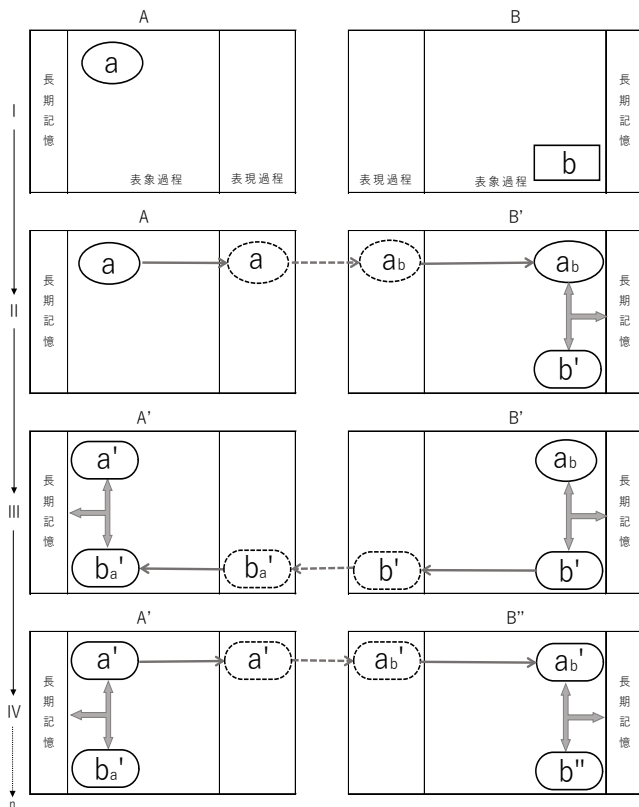
第2章では、シンボリック相互作用論や意味づけ論、またそのモデルを検討し、シンボリック相互作用論におけるシンボルの共有を間主観的に捉える必要があることを示したうえで、「参加者間で間主観的に形成された意味づけの共有」を《共創的共有項》とし、そのモデル化を行った。

シンボリック相互作用論は、「シンボルを通じての人間の相互作用に焦点を置き、そこにおける人間の「解釈」過程に着目し、そこから人間の主体的あり方を明らかにしようとする理論」(船津衛,1976,p.1)であると説明される。そのようなシンボルの共有は、田中茂範・深谷昌弘(1998)が「文字どおり同一の何かを共有していることを意味しているのではない」(p.42)と指摘するように、間主観的なものとして捉えられるはずである。しかし、間主観的なものとして捉えたモデルは示されていない。そこで、本研究では「参加者間で間主観的に形成された意味づけの共有」を《共創的共有項》とし、モデル化を行った。

モデル化の際には、まず国語科音声言語活動研究におけるモデルを整理し、個体内の認知的変容と間主観的な意味づけの共有が統合されていないという問題点を示した。その上で、相互作用における個体内の変化を重視した加藤秀俊(1966)の「コミュニケーションと個体内変化」(p.85)のモデルを援用しながら、相互作用における間主観的な意味づけの共有を、個人の認知過程とその変容とともに示した。その際、現実題材／虚構題材の二つの題材を区分し、虚構題材では「題材を解釈する自己」と「発言を解釈する自己」の二つの自己が認められることを先行研究をもとに示した。その上で、それぞれの題材における《共創的共有項》形成モデルを〔図1〕〔図2〕のように理想モデル⁵として提示した。

⁵ モデルはあくまで理想モデルとして示している。このように完璧に《共創的共有項》の形成が起こることは現実的でなく、一部分で共有を起こすと考えられる。

【図1】 現実題材における《共創的共有項》形成モデル



A/B…参加者

a/b…A/B それぞれの意味づけ

意味づけの異なりを図形で示す

▼段階 I

題材に対して A/B が異なる意味づけ a/b を行っている。

▼段階 II

A の発言が B に ab として取り込まれ、自身の意味づけと長期記憶に働きかけて、新たな意味づけ b' を生成する。

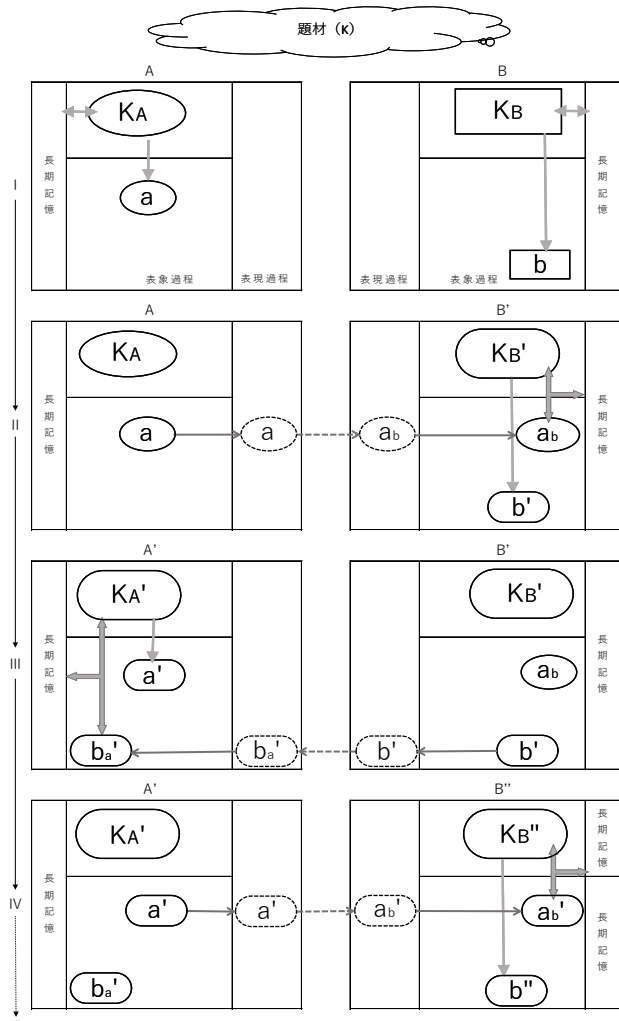
▼段階 III

段階 II で生成された b' が A に ba' として取り込まれ、a' を生成する。この時、互いの意味づけは影響を与えあっている。

▼段階 IV

《共創的共有項》が完全に理想的に形成された状態。

【図2】 虚構題材における《共創的共有項》形成モデル



K…参加者に提示された虚構題材

表象過程上段 …虚構題材を解釈する自己

表象過程下段 …発言を解釈する自己

▼段階 I

K を意味づけ (KA/KB)、それをもとにそれぞれの意味づけ a/b を生成している。

▼段階 II

B に ab が取り込まれ KB と長期記憶に働きかけて KB' を生成し、それをもとに新たな意味づけ b' を生成する。

▼段階 III

段階 II で生成された b' が A に ba' として取り込まれ、KA' を生成し、a' を生成する。この時、互いの意味づけは影響を与えあっている。

▼段階 IV

《共創的共有項》が完全に理想的に形成された状態。

この時、K に対しても A/B は同様の意味づけを共有している。

第3章 《共創的共有項》に着目した話し合い実践の検討

第3章では、絵本や5コマ漫画を題材とした話し合い実践における、小学校2年生の少人数の自律的な話し合い場面を分析し、《共創的共有項》形成が具体的にどのように現出するのかを、児童の発言や記述を参照しながら示した。

実践iでは、『かぜのでんわ』と『かいじゅうたちのいるところ』の二冊の絵本を用いた二つの話し合い実践における児童の発言や記述を分析した。先行した『かぜのでんわ』を用いた実践において、進行方法や自己評価から4班と8班を抽出し、個人では表出に至らなかった新たな意味づけに着目して分析を行った。その結果、4班では話題の累積によって新たな意味づけが多数表出したのに対し、8班では話題の累積がほとんど見られず、新たな意味づけの表出が少なかったことを指摘した。それをもとに『かいじゅうたちのいるところ』を用いた話し合いにおける4班をさらに分析した。『かいじゅうたちのいるところ』実践における4班の児童の話し合いの自己評価は低く、話し合いが一見論争的になる場面も見受けられた。しかし、そのような4班においても、新たな意味づけは多数表出していた。そこで「発話」と〈意味づけ〉を区分して解釈し検討を行った結果、一見言い合いの様相を呈し語気の強まりや割込み発言が多く見られた4班の話し合いにおいて、発言すべてが否定されているわけではなく、班員間で間主観的な意味づけの共有が行われ、《共創的共有項》が形成されながら、共有できなかった部分において論争が起きていることが確認された。同様に『かぜのでんわ』実践における8班の話し合いを検討すると、同意が示されながらも《共創的共有項》が形成されていないことが確認された。そのことによって、《共創的共有項》が同意などの反応や発言の言語機能には依存せずに形成されることが示唆された。

実践iiでは、5コマ漫画を用いた話し合い実践における児童の発言や記述を分析した。児童の話し合いの自己評価から、参加者全員が話し合いに肯定的な評価を行っていた5班と6班を抽出した。個人では表出されていなかったセリフが班作品で新たに形成される場面に着目して、実践i同様、「発話」と〈意味づけ〉を区分して解釈し分析を行った。その結果、班作品において新たにセリフが考察されている場面では《共創的共有項》の形成が認められ、新たな意味づけの表出と《共創的共有項》形成に連関が見られることが示されたといえる。

実践i・iiの分析から、新たな意味づけに着目し、「発話」と〈意味づけ〉を区分して分析を行うことで《共創的共有項》形成の具体を示すことができたといえる。また、そのような《共創的共有項》の形成が言語機能に依存せずに形成されることや、新たな意味づけの表出と《共創的共有項》の形成に連関が見られることが示唆された。

第4章 話し合いにおける《共創的共有項》形成の実証的検討

第4章では、《共創的共有項》形成の学齡的差異、題材による差異の検討を行った。小学校3年生と5年生において、現実題材／虚構題材を用いた話し合い調査を行い、計26の話し合い記録における児童の記述や発言を分析した。分析は、第2章の考察や第3章の実践分析をもとにした以下の仮説に基づいて行った。

- | |
|---|
| <p>①個人では行われなかった新たな意味づけが話し合いにおいてより多く表出している班においては、《共創的共有項》が形成されており、それにともなって題材に関わる解釈の変容が起こることで新たな意味づけが創出される。</p> <p>②学齡の差異によって、形成される《共創的共有項》には質的な差異が生じる。</p> |
|---|

③現実的な解釈を必要とする現実題材と、より象徴的な解釈を必要とする虚構題材では、《共創的共有項》の形成の仕方が異なる。

まず、調査結果の数的概括を示した。各班の話し合いの全発話数における新たな意味づけの表出率を示し、その意味づけ率と話し合い自己評価の数値を検討した。その結果、3年生においては意味づけ率の高さが話し合いの肯定的な自己評価とある程度相関しているのに対し、5年生では、むしろ意味づけ率が高いほど話し合いの自己評価が低くなっていることが示された。5年生の児童にとっては、《共創的共有項》形成が行われるような新たな意味づけが表出する話し合いは居心地の悪いものであり、3年生に比して話し合いが複雑な様相を見せていることが推察される。

次に、それぞれの話し合いを第3章と同様に「発話」と〈意味づけ〉に区分し、それぞれの学年／題材における意味づけ率の最も高かった班と最も低かった班を対象に考察を行った。その際には、〈意味づけ〉の下位区分として、帰納的に抽出した〔経験〕〔事実〕〔感情〕〔判断〕〔提案〕〔補足〕を用いて分析検討を行った。そのことによって、仮説①について、どちらの学年においても《共創的共有項》が形成されることで、新たな意味づけが表出していることを確認した。しかし、《共創的共有項》の形成と新たな意味づけの表出が常に連動するわけではなく、《共創的共有項》形成に向かいながらもそれが瓦解した場合や、新たな発見を次々に示すような話し合いフェーズでは、《共創的共有項》の形成が認められないまま、新たな意味づけが表出することが確認された。仮説②については、3年生と5年生の《共創的共有項》形成は、その抽象度に差異があることを示した。3年生においては〔経験〕や〔事実〕といった個人的・具体的な意味づけの累積によって《共創的共有項》が形成されており、累積がなされていない場合、《共創的共有項》の形成が困難な姿が見られた。また仮説③について、題材の差異として、虚構題材における意味づけが、相手発話とテキストの二つの方向に対する二重の指向性を持っていること示し、特に5年生の現実題材においては、〔判断〕の検討によって《共創的共有項》の形成が志向されたのに比して、虚構題材においては、〔事実（テキスト）〕の意味づけが数多く表出することで《共創的共有項》が形成されるという異なりがあることを示した。

第5章 国語科における《共創的共有項》形成をふまえた話し合い支援への提言

第5章では、ここまで理論的・実証的に考察してきた《共創的共有項》形成が、話し合い指導支援において、能力観や評価の視点からどのように位置づけられるのかを考察し、具体的な話し合い支援に対してどのように寄与し得るのかを検討した。

《共創的共有項》の形成は、それぞれの児童の意味づけが、話し合いの中で再構成され共有されていく過程を扱ったものである。その点で、個体内の能力としてそれらを一般化することは困難であり、そのような一般化を志向するわけではないことを確認した。一回限りの話し合いという状況に強く依存するといえる。能力の発達を個人に属する状況を横断する抽象的な概念として捉えるのではなく、その場のコミュニケーションにおける具体的・状況依存的な過程として捉える立場であり、関係の中で出現する能力として捉える試みであることを示した。また、《共創的共有項》の形成に着目することは、話し合い全体に対する評価というよりは、話し合い過程に対して、それをよりミクロな視点で評価・検討することを可能にするものであることを述べた。

また、《共創的共有項》に着目して指導支援を行う際の課題を整理し、話し合い事後の取り立て指導と話し合い事前における話し合い状況の整備への支援について第3・4章の児童の実態を踏まえながら検討を

行った。

《共創的共有項》に着目して指導支援を行う際の大きな課題は、《共創的共有項》形成と発話機能が連動しない点、また《共創的共有項》形成と話し合いへの自己評価が連動しない点にある。児童自身に振り返りを求めた場合、それは「まとまったかどうか」や「おだやかに進行したかどうか」によって評価がなされてしまう可能性があると考えられる。そこで、特に高学年を対象として、「言い合い」のようにみえ、児童の自己評価が低い」一方で、「意味づけ率の高い」話し合いの文字化資料を用いて、話し合いを対象化する振り返りの取り立て指導を行うことを提案した。話し合いにおける意味づけのずれ違いを発見し、そのずれ違いをどのように解消していくのかを考えることを繰り返すことは、《共創的共有項》形成について考えることと結びつく。また、そのように話し合いを振り返ることで、言い合いのように見える話し合いの再評価にもつながると考えられる。

そのような取り立て指導とは別に、《共創的共有項》が盛んに形成されるような話し合いの「状況」、すなわち話し合いの環境を整える支援も考え得る。第3・4章の児童の実態からは、共同の参照点をもとに意味づけを重ねることで《共創的共有項》の形成に至る姿が見受けられた。また、題材に関わらず[経験]としての意味づけを数多く表出していた児童の存在が認められた。ここから、話し合い題材や班形成を検討することで、《共創的共有項》形成のための支援が可能であることを述べた。

《共創的共有項》形成に着目することは、話し合いにおける能力観や評価に対して新たな観点を示すだけではなく、話し合い事後の取り立て指導や話し合い事前における話し合い状況の整備への支援などによって、具体的な国語科の話し合い学習に寄与し得ることを示した。

終章 研究の成果と課題

終章では、研究の成果を総括するとともに、今後に残された課題を示した。本研究の成果は、次のように整理できる。

一つ目は、国語科の話し合い学習者研究における課題を明らかにし、シンボリック相互作用論や意味づけ論を援用しながら、《共創的共有項》概念の定義とモデル化を行ったことである。社会的な行為である話し合いにおいて、意味づけの共有過程に着目する必要があることを示し、《共創的共有項》を「参加者間で間主観的に形成された意味づけの共有」と定義し、その形成モデルを考察した。

二つ目は、《共創的共有項》の形成を、具体的な話し合い場面から提示したことである。小学校2年生における話し合いを、児童の「発話」とそこに見られる〈意味づけ〉とに区分しながら、新たな意味づけの表出に着目して分析を行うことで、《共創的共有項》の形成を見取ることを可能にした。

三つ目は、《共創的共有項》の形成過程を3年生と5年生の話し合いから実証的に検討したことである。学齢や題材の異なりによる《共創的共有項》形成の差異に言及しながら、その実態を分析考察した。また、それらの考察をもとに、国語科の話し合い支援への可能性を提示した。

本研究の最も大きな成果は《共創的共有項》概念を抽出し、その形成過程を実証的に示したことにあつた。この《共創的共有項》は、話し合いの能力を状況依存的な関係の中で出現するものとして捉えることを可能にし、ミクロな話し合い過程を評価する観点になり得ると考える。

一方で、本研究では実際の国語科話し合い授業における《共創的共有項》形成に着目した指導や支援の有効性の検証には至っていない。この点が主要な課題である。《共創的共有項》が形成される話し合いを意図的に指導・支援していくための研究を進めていく必要があると考える。

4. 主要引用参考文献

- ・秋田喜代美・市川洋子・鈴木宏明（2000）「アクションリサーチによる学級内関係性の形成過程」『東京大学大学院教育学研究科紀要』40巻 pp.151-169
- ・秋田喜代美・市川洋子・鈴木宏明（2002）「授業における話し合い場面の記憶—参加スタイルと記憶—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42巻 pp.257-273
- ・秋田喜代美（2007）「教室談話を通じたメタ認知機能の育成」『心理学評論』50巻第3号 pp.285-296
- ・浅井哲司「音声・文字提示型教材による話し合い事後指導方法の開発—学習者自身の音声話し合いに与える影響の分析—」『国語科教育』85巻 pp.14-22
- ・荒川智・越野和之（2013）『インクルーシブ教育の本質を探る』全国障害者問題研究会
- ・有元秀文（1999）「「活発に討論する授業」をどう創造するか—コミュニケーションを核とした「総合的な学習」—」『国語科教育』46巻 pp.24-31
- ・磯村陸子・町田利章・無藤陸（2005）「小学校低学年クラスにおける授業内コミュニケーション：参加構造の転換をもたらす「みんな」の導入の意味」『発達心理学研究』16巻1号 pp.1-14
- ・一柳智紀（2009a）「物語文読解の授業談話における「聴き合い」の検討：児童の発言と直後再生記述の分析から」『発達心理学研究』20巻4号 pp.437-446
- ・一柳智紀（2009b）「児童による話し合いを中心とした授業における聴き方の特徴—学級と教科による相違の検討—」『教育心理学研究』57巻3号 pp.361-372
- ・一柳智紀（2012）『授業における児童の聴くという行為に関する研究—バフチンの対話論に基づく検討—』風間書房
- ・位藤紀美子監修（2014）『言語コミュニケーション能力を育てる—発達調査をふまえた国語教育実践の開発—』世界思想社
- ・伊藤崇（2020）『越境する認知科学4 大人につきあう子どもたち—子育てへの文化歴史的アプローチ—』共立出版
- ・井上俊（2009）「第5章 対話というコミュニケーション」長谷正人・奥村隆編『コミュニケーションの社会学』有斐閣
- ・井上尚美・福沢周亮（1996）『国語教育・カウンセリングと一般意味論』明治図書
- ・ウィリアム・S・ハウエル・久米照元（1992）『感性のコミュニケーション—対人融和のダイナミズムを探る—』大修館書店
- ・植田一博・岡田猛編（2000）『協同の知を探る—創造的コラボレーションの認知科学—』共立出版
- ・植西浩一（2015）『聴くことと対話の学習指導論』溪水社
- ・上山伸幸（2013）「国語科における小集団での話し合いモデルの検討—Neil Mercerの「探索的会話」に関する論を中心に—」『論叢国語教育学』第9巻 pp.11-23
- ・上山伸幸（2015a）「方法知の有効性の自覚化を促す話し合い学習指導の研究—小学校4年生を対象とした実験授業の分析を中心に—」『国語科教育』第77巻 pp.14-21
- ・上山伸幸（2015b）「方法知の活用を促す話し合い学習指導の開発—小学校4年生を対象とした授業の分析を通して—」『国語科教育』第78巻 pp.16-20
- ・上山伸幸（2021）『小学校国語科における話し合い学習指導論の構築—メタ認知を促す授業とカリキュラムの開発をめざして—』溪水社

- ・内田剛 (2016) 『国語科における「話し合い」学習の理論と実践』早稲田大学博士論文
- ・遠藤克彦 (2007) 『コミュニケーションの哲学 ハーバーマスの語用論と討議論』世界書院
- ・大石初太郎 (1967) 『話しことば』筑摩書房
- ・大村幸子 (2021) 「話し合い学習における学習者の学びの姿—学習者のメタ認知的知識に着目した分析を通して—」『国語科教育』90巻 pp.44-52
- ・大村はま (1983) 『大村はま国語教室 第二巻』筑摩書房
- ・岡本雅史 (2016) 「コミュニケーションの「場」を多層化すること—メタ・コミュニケーション概念の認知語用論的再検討—」『社会言語科学』第19巻 第1号 pp.38-53
- ・長田友紀 (1999) 「「思考」と「コミュニケーション」を統合する話し言葉教育の検討—対人コミュニケーション論を手がかりとして—」『人文科教育研究』第26巻 pp.49-58
- ・長田友紀 (2005) 「話し合いの構造把握のための事中指導—視覚情報化による可能性—」『月間国語教育研究』第393号 pp.46-51
- ・長田友紀 (2008) 「話し合い指導における学習指導過程上の困難点—状況的認知アプローチからみた事前・事中・事後指導—」『日本語と日本文学』第47巻 pp.1-12
- ・長田友紀 (2010) 「国語科におけるコミュニケーション能力研究の課題」『人文科教育研究』第37巻 pp.33-53
- ・長田友紀 (2011) 「国語教育における話し言葉指導の目標論の検討」『文藝言語研究 文藝篇』第60巻 pp.27-46
- ・長田友紀 (2013) 「2 話すこと・聞くことの学習指導の内容・方法に関する研究の成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と課題Ⅱ』pp.69-76
- ・長田友紀 (2014) 「話し合いにおける視覚情報化ツールのテキストマイニングによる発達の分析—小・中・大学生に見る図示化メモの効果—」『国語科教育』75巻 pp.16-23
- ・長田友紀 (2016) 『国語教育における話し合い指導の研究—視覚情報化ツールによるコミュニケーション能力の拡張—』風間書房
- ・小野田亮介 (2015) 「討論活動における児童の聴き方と発話内容の関連：賛成論と反論に対する聴き方の偏りに着目して」『発達心理学研究』26巻 pp.358-370
- ・ガート・ピースタ (2018) 上野正道監訳『教えることの再発見』東京大学出版会
- ・甲斐雄一郎・森美智代 (2013) 「序 話すこと・聞くことの学習指導に関する研究の概観と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書
- ・片岡邦好・池田佳子編 (2013) 『コミュニケーション能力の諸相 変移・共創・身体化』ひつじ書房
- ・加藤秀俊 (1966) 『人間関係』中央公論社
- ・河野順子 (2002) 「説明的文章の学習指導改善への提案—「メタ認知の内面化モデル」を通して—」『国語科教育』第51巻 pp.66-73
- ・河野順子 (2009) 『入門機のコミュニケーションの形成過程と言語発達—実践的実証的研究—』溪水社
- ・北川雅浩 (2014) 「協働探究を志向した討論力の育成—〈協同的討論〉と〈対話的討論〉の開発—」『月間国語教育研究』No.505 pp.50-57
- ・北川雅浩 (2016) 「小学校段階で討論を円滑に導入する方補の検討—討論において協同性を育むことの意義とその指導方法を中心に—」『国語科教育』79巻 pp.23-30

- ・北川雅浩 (2018a) 「小学校段階における討論学習の必要性の再検討—認知面と心理面への影響の分析を通して—」『国語科教育』83 巻 pp.15-23
- ・北川雅浩 (2018b) 「自律的な討論の実現に向けた指導に関する一考察—小学校段階における〈議論展開能力〉の育成を中心に—」『国語科教育』84 巻 pp.40-48
- ・鯨岡峻 (1999) 『関係発達論の構築』ミネルヴァ書房
- ・鯨岡峻 (2006) 『ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房
- ・熊谷智子 (1997) 「はたらきかけのなかのやりとりとしての会話」茂呂雄二編『対話と知 談話の認知学入門』新曜社
- ・倉澤栄吉・青年国語研究会 (1970) 『国語科 対話の指導』新光閣書店
- ・倉盛美穂子・高橋登 (1998) 異なった意見をもつ児童間で行われる話し合い過程の発達の検討『発達心理学研究』9 巻 3 号 pp.191-200
- ・倉盛美穂子 (1999) 「児童の話し合い過程の分析—児童の主張性・認知的共感性が話し合いの内容・結果に与える影響—」『教育心理学研究』47 巻 2 号 pp.121-130
- ・桑野隆 (2021) 『生きることとしてのダイアローグ—バフチン対話思想のエッセンス』岩波書店
- ・桑原隆編 (2008) 『新しい時代のリテラシー教育』東洋館出版
- ・河野哲也 (2019) 『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』岩波書店
- ・後藤大二郎・和田一郎 (2019) 「協働的知識構築モデルを基軸とした理科授業デザインに関する研究—小学校第 3 学年「かげと太陽」の実践を事例として—」『理科教育学研究』第 59 巻 第 3 号 pp.367-377
- ・小山亘 (2012) 『コミュニケーション論のまなざし』三元社
- ・近藤卓 (2010) 『自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践—』
- ・西郷竹彦 (1995) 『虚構論入門—虚構・真実・美—』明治図書
- ・斎藤美津子 (1972) 『きき方の理論』サイマル出版社
- ・酒井千春 (2000) 「話し合いの生成過程に関する一考察—個人間の調節を促す要因を中心に—」『国語科教育』47 巻 pp.73-80
- ・坂本喜代子 (2004) 「相互作用分析による対話的コミュニケーションの研究」『国語科教育』56 巻 pp.26-33
- ・坂本喜代子 (2017) 『対話的コミュニケーションが生まれる国語』溪水社
- ・佐治伸郎 (2020) 『信号、記号、そして言語へ—コミュニケーションが紡ぐ意味の体系—』共立出版
- ・佐々原正樹 (2014) 「「解釈の偏り」を前提にした授業実践の構想—「ごんぎつね」を事例として—」『国語科教育』第 75 巻 pp.56-63
- ・佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして—』北大路書房
- ・佐藤公治 (1999) 『対話の中の学びと成長』金子書房
- ・佐藤佐敏 (2011) 「解釈する力を高める話し合い—「解釈のアブダクションモデル」に基づく発問と話し合い—」『国語科教育』69 巻 pp.11-18
- ・三宮真智子 (2004) 「コミュニケーションを育てるメタ認知」秋田喜代美編『子どもたちのコミュニケーションを育てる』教職研修
- ・三宮真智子 (2008) 『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房
- ・末田清子・福田浩子(2003) 『コミュニケーション学 その展望と視点』松柏社

- ・末田清子・福田浩子（2011）『コミュニケーション学—その展望と視点— 増補版』松柏社
- ・住田勝・寺田守・田中智生・砂川誠司・中西淳・坂東智子（2016）「社会文化的相互作用を通して構成される文学の学び—「ヴィゴツキーベース」を用いた「高瀬舟」の授業分析—」『国語科教育』第79巻 pp.39-46
- ・全国大学国語教育学会編（2002）『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書
- ・全国大学国語教育学会編（2013）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』明治図書
- ・高木まさき（2001）『「他者」を発見する国語の授業』大修館書店
- ・高橋俊三（1993）『対話能力を磨く—話し言葉の授業改革—』明治図書
- ・高橋俊三編（1994a）『講座「音声言語の授業」第3巻 話し合うことの指導』明治図書
- ・高橋俊三編（1994b）『講座「音声言語の授業」第2巻 聞くことの指導』明治図書
- ・高橋俊三・声と言葉の会（1998）『聴く力を鍛える授業』明治図書
- ・高橋俊三編（1999）『音声言語指導大事典』明治図書
- ・高橋俊三（2001）『国語科話し合い指導の改革—グループ討議からパネル討論まで—』明治図書
- ・竹内常一（2015）「生活指導におけるケアと自治」『生活指導とは何か』竹内常一他編 高文研
- ・竹内常一（2016）『新・生活指導の理論：ケアと自治：学びと参加』
- ・田近洵一（1996）『創造の〈読み〉』東洋館出版社
- ・多田孝志（2016）『グローバル時代の対話型授業の研究』兵庫教育大学博士論文
- ・田中茂範・深谷昌弘（1998）『〈意味づけ論〉の展開』紀伊國屋書店
- ・谷口直隆（2010）「「適応的なメタ認知能力」の育成を目指したコミュニケーション教育の提案」『国語科教育』68巻 pp.19-26
- ・出口拓彦（2002）「グループ学習に対する教師の指導および児童の特性と学習中の発現頻度との関連」『教育心理学研究』50巻3号 pp.323-333
- ・永田麻世（2009）『クィア・スタディーズとしての国語教育の構築—アイデンティファイする学びの提案—』広島大学博士論文
- ・中村敦雄（1998）『コミュニケーション意識を育てる発信する国語教室』明治図書
- ・奈田哲也・丸野俊一（2007）「協同問題解決場面での知的方略の内面化過程の検討：エラー分析を用いて」『発達心理学研究』18巻第2号 pp.139-149
- ・奈田哲也・丸野俊一（2009）「他者との協同構成過程での知的方略の内面化はいかにしたら促進されるか」『発達心理学研究』20巻第2号 pp.165-176
- ・奈田哲也・丸野俊一（2011）「他者との協同構成によって獲得された知はいかに安定しているか」『発達心理学研究』22巻第2号 pp.120-129
- ・難波博孝・牧戸章（1997）『「言語活動の心内プロセスモデル」の検討—国語学力形成の科学的根拠の追求—』『国語科教育』44巻 pp.154-145
- ・難波博孝・三原市立三原小学校（2007）『PISA型読解力にも対応できる 文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書
- ・難波博孝（2018）『ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業—国語科で論理力を育てる—』明治図書
- ・西口光一編『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』凡人社

- ・西原哲雄・福田稔・早瀬尚子・谷口一美監修 早瀬尚子編 (2018)『言語研究と言語学の進展シリーズ 第2巻 言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論、認知言語学、社会言語学—』開拓社
- ・日本コミュニケーション学会 (2011)『現代日本のコミュニケーション研究—日本コミュニケーション学の足跡と展望—』三修社
- ・野村亮太・丸野俊一 (2012)「個人の認識論から批判的思考を問い直す」『認知科学』19巻 pp.9-21
- ・早瀬尚子編 (2018)『言語と認知とコミュニケーション—意味論・語用論、認知言語学、社会言語学—』開拓社
- ・濱田秀行 (2010)「小説の読みの対話的な交流における「専有」」『国語科教育』68巻 pp.43-50
- ・濱田秀行 (2016)「文学的文章について読みが教室において深まる過程—中学校国語科の授業事例分析を通して—」『国語科教育』80巻 pp.39-46
- ・原田大介 (2009)「国語教育における新たな学習者研究の構築—個へのまなざしの必要性—」『国語科教育』65巻 pp.11-18
- ・深谷昌弘・田中成範 (1996)『コトバの〈意味づけ論〉』紀伊國屋書店
- ・福岡教育大学国語科他『共生時代の対話能力を育てる国語教育』明治図書
- ・藤井真樹 (2019)『他者と「共にある」とはどういうことか—実感としての「つながり」—』ミネルヴァ書房
- ・藤江康彦 (1999)「一斉授業における子どもの発話スタイル—小学5年の社会科授業における教室談話の質的分析」『発達心理学研究』10巻2号 pp.125-135
- ・藤江康彦 (2000)「一斉授業の話し合い場面における子どもの両義的な発話の機能—小学5年の社会科授業における教室談話の分析—」『教育心理学研究』48巻1号 pp.21-31
- ・藤森裕治 (1995)『対話的コミュニケーションの指導—「話し合い」における「感性のレトリック」—』明治図書
- ・藤森裕治 (2002)「1話すこと・聞くことの学習指導目標設定に関わる研究の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望』学芸図書
- ・藤森裕治 (2005)「文学的文章の〈読み〉と話し合い—その本質的関連性における一考察—」『国語科教育』第58巻 pp.18-25
- ・藤森裕治 (2013)「国語科授業研究・学習者研究に関する成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書
- ・船津衛 (1976)『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣
- ・船津衛・宝月誠編 (1995)『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣
- ・本田由紀 (2005)『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで—』NTT出版
- ・増田信一 (1994)『音声言語実践史研究』学芸図書株式会社
- ・間瀬茂夫・守田庸一・松友一雄・田中俊弥 (2007)「小学生の話し合いの能力の発達に関する研究—同一課題による調査を通じた考察—」『国語科教育』62巻 pp.67-74
- ・松尾剛・富田英司・丸野俊一 (2005)「対話の場としての教室づくりに関する研究の現状と課題：グラウンド・ルールとリヴォイシングを中心に」『教師の“ディスカッション教育”の技能開発と教育支援システム作り』平成14~16年度研究報告書

- ・松尾剛・丸野俊一（2009）「学び合う授業を支える談話ルールをいかに共有するか」『心理学評論』52巻第2号 pp.245-264
- ・松本修（2001）「文学の読みとその交流の実践的意義」『国語科教育』49巻 pp.49-56
- ・松本修（2003）「読みの交流における話題と話し合いの様相」『国語科教育』54巻 pp.11-18
- ・松本修（2005）「状況の文脈を「資源」とした読みとその交流の可能性」『国語科教育』58巻 pp.10-17
- ・松本修（2006a）「読みにおける状況の文脈の導入と語りの構造」『国語科教育』60巻 pp.13-20
- ・松本修（2006b）『文学の読みの交流とナラトロジー』東洋館
- ・松本修（2011）「読みの交流を促す〈問い〉の5つの要件の検討—教材「庭の一部」の話し合いに基づいて—」『国語科教育』70巻 pp.84-91
- ・丸井一郎（2006）『言語相互行為の理論のために—「当たり前」の分析—』三元社
- ・丸野俊一・生田淳一・堀憲一郎（2001）「目標の違いによって、ディスカッションの過程や内容がいかかに異なるか」『九州大学心理学研究』2巻 pp.11-33
- ・村松賢一（1998）『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書
- ・村松賢一（2001）『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習—理論と実践—』明治図書
- ・本山方子（1999）「社会環境との相互作用による「学習の生成」—総合学習における子どもの参加過程の解釈的分析—」『カリキュラム研究』8巻 pp.101-116
- ・森美智代（2001）「「語られる身体」としての「聞くこと」—「聞くこと」の学びの生成—」『国語科教育』49巻 pp.65-72
- ・森美智代（2011a）『〈実践＝教育思想〉の構築—「話すこと・聞くこと」教育の現象学』溪水社
- ・森美智代（2011b）「「話すこと・聞くこと」の教育における〈論理〉」『児童教育学を創る—福山市立大学開学記念論集—』児島書店
- ・森美智代（2012）「国語科の「話し合い」活動を支える理論の検討—ハーバーマスのコミュニケーション論を中心として—」『国語科教育』72巻 pp.17-24
- ・諸富祥彦・末武康弘・保坂享訳(2005)『ロジャーズ主要著作集 3 ロジャーズが語る自己実現の道』岩崎学術出版
- ・諸富祥彦（2014）『新しいカウンセリングの技法—カウンセリングのプロセスと具体的な進め方』誠新書房
- ・茂呂雄二（1999）『具体性のヴィゴツキー』金子書房
- ・茂呂雄二編（1997）『対話と知 談話の認知科学入門』新曜社
- ・森久保安美編（1989）『話しことば教育の復興 1 話しことば教育のプログラム』明治図書
- ・森久保安美編（1989）『話しことば教育の復興 2 話しことばが育つ学級』明治図書
- ・森久保安美編（1989）『話しことば教育の復興 3 話しことばを磨く実践』明治図書
- ・安直哉（1996）『聞くこと話すことの教育学—国語教育基礎論—』東洋館出版社
- ・安直哉（2013）「話すこと・聞くことの評価に関する研究の成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書
- ・山元悦子（1995）「話しことば指導の領域とその系統について」『福岡教育大学紀要』44号第1分冊文化編 pp.55-65
- ・山元悦子（1996）「対話指導のための基礎論研究—対話展開力をとらえる指標—」『福岡教育大学紀要』

45号第1分冊 pp.27-42

- ・山元悦子・福岡教育大学国語科福岡教育大学附属中学校（1997）『共生時代の対話能力を育てる国語教育』明治図書
- ・山元悦子（2002）「聞く・話す力を育てる国語科教育の構想—「話し合い」を中心に—」福岡大学紀要第51号第1分冊 pp.57-70
- ・山元悦子（2003a）「話し合う力を育てる学習指導の研究—メタ認知の活性化を図る手だてを通して—」『国語科教育』 pp.51-58
- ・山元悦子（2003b）「「話すこと・聞くこと」と対話」『実践国語研究』12月号 No.249 pp.48-53
- ・山元悦子（2006）「小学校国語科におけるコミュニケーション教育の方向」『福岡教育大学紀要』第55号第1分冊 pp.71-81
- ・山元悦子（2014）「コミュニケーションの社会文化的構造—教室コミュニケーション文化の位置—」位藤紀美子監修『言語コミュニケーション能力を育てる—発達調査をふまえた国語教育実践の開発—』世界思想社
- ・山元悦子・松尾剛・若木常佳・稲田八穂・河野順子・幾田伸司・三浦和尚（2014）「小学生の話し合う力をどう見取るか—発達研究に依拠した実態調査を手がかりに—」『日本教科教育学会誌』第37巻第1号 pp.53-62
- ・山元悦子（2016）『発達モデルに依拠した言語コミュニケーション能力育成のための実践開発と評価』溪水社
- ・山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築—読書反応を核としたリテラシー実践に向けて—』溪水社
- ・山元隆春（2014）『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社
- ・吉田裕久（2002）「序 話すこと・聞くことの研究史の概観と本章の課題」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書
- ・義永（大平）未央子（2005）「伝達能力を見直す」『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』凡人社
- ・若木常佳（2005）「対話能力を育成するためのカリキュラムについての研究—「方略的知識」と「関係づける力」を中心に—」『国語科教育』58巻 pp.26-33
- ・若木常佳（2006）「話す・聞く能力の認知的側面に関する中学生の実態—独話理解の場合—」『日本教科教育学会誌』第29巻第3号 pp.29-38
- ・若木常佳（2009）「小・中学校における聞き取り能力の実際と指導上の課題—「並列的複数情報の関係づけを支える心的作業」について—」『国語科教育』65巻 pp.3-10
- ・若木常佳（2011）『話す・聞く能力育成に関する国語科学習指導の研究』風間書房
- ・若木常佳（2016）『大村はまの「学習の手びき」についての研究—授業における個性化と個別化の実現—』風間書房
- ・渡辺貴裕（2019）「協働的であり深い省察を伴う授業検討会に向けての話し合いの様相の変容—教職大学院における模擬授業検討会の取り組みの事例を手がかりに—」『日本教師教育学会年報』28号 pp.96-106
- ・D.スペルベル・D.ウイソン著 内田聖二ら訳（1999）『関連性理論（第2版）』研究社
- ・Gerry Stahl（2016）『Essays in Philosophy of Group Cognition』

- ・H.ブルーマー著 後藤将之訳 (1991)『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法—』勁草書房
- ・ジェニートマス著 浅羽亮一監修 (1998)『語用論入門—話し手と聞き手の相互交流が生み出す意味』研究者出版
- ・K.J.ガーゲン著 東村知子訳 (2004)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版
- ・K.J.ガーゲン著 永田素彦・深尾誠訳 (2004)『社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版
- ・Prasad,Pushkala 著 箕浦康子監訳 (2018)『質的研究のための理論入門—ポスト実証主義の諸系譜—』ナカニシヤ出版
- ・P.パースキー・P.ハグランド著 丸田俊彦監訳 (2004)『間主観的アプローチ臨床入門 意味理解の共同作業』岩崎学術出版社
- ・R.D.ストロロウ・B.ブランチャフ・G.E.アトウッド著 丸田俊彦訳 (1995)『間主観的アプローチ コフートの自己心理学を超えて』岩崎学術出版社
- ・W.S.ハウエル・久米昭元 (1992)『感性のコミュニケーション—対人融和のダイナミズムを探る—』大修館書店